

浦島伝説の転成

—その社会的変容—

人口に膾炙した浦島太郎譚

いわゆる浦島太郎と題された名称で広く世に知られるこの昔話は一体どのような来歴をもっているのか、この話を遡行的に辿り直し、考察の対象とすることはきわめて意義ある試みだと思える。なぜなら、この浦島太郎の話に代表される浦島伝説には、特定の時空間を超えたさまざまなジャンルにわたるあまたの伝承や作品群があり、古来人々の語りや口承書承あるいは創作の意欲をかきたてる格好の題材として長く機能してきたからである。そして、古くは記・紀・風土記・万葉の時代にも遡りうる長い時間的射程を有し且つ、小説や和歌世界から能・狂言・浄瑠璃といった芸能世界に至るまで幅広く題材を提示し、老若を問わず貴族層から衆庶まで様々な人間の貪欲なまでの欲望や要求を呑み込んで、ダイナミックな表現を形成しているからである。それぞれ時代ごとの意

大内建彦

匠をまといつつさまざまに語りつがれてきた話の典型であって、通史としての文化史あるいは社会史を貫いてそのあり様を象徴的に照射しうる格好のテキストの一つとこのようにするのである。

この浦島伝承の根づよさの一大要因は未知の世界としての異郷・桃源郷に対する人間のつkinない興味にあり、それとは裏腹に人間の側の生の根源に横たわる寿命というつらい制約がそうした超時間的空間的なコトピア体験をつかの間かいま見ることと解消されたかの気持ちにひたれるからであろう。換言すれば、人間の生のうちに潜むせない喪失感や虚無感といったものをほどよく解放してくれるものがこの話のうちに達成されているからである。

さて、ここで私たちの頭脳にインプットされている世に知られる浦島譚の全体像をおさらいしておこう。昔話

というスタイルをまもっているために一見古からのものに思えるが、この浦島譚がこれほどまでに人口に膾炙するものとなったのはそう古いことではなく、明治四三年に改訂された第Ⅱ期国定教科書の国語教材として『尋常小学読本』巻三に載せられたことにはじまる。この明治国家的な国定教科書制度は明治三七年四月にはじまるが、この浦島太郎の話は上記のように第Ⅱ期の明治四三年に初めて登場して以来、この国定教科書が廃止される昭和二三年まで一貫して小学二年生用に供されて載りつづける。すなわち日露戦争後、明治日本が本格的に帝国主义段階に入ってから、その帝国が崩壊するまでの約四〇年間もの間、この浦島の話は細部の表現等についてはいくらか改変されつつも、その内容そのものは全く変わることなく、北は北海道から南は九州まで、あるいは海外植民地の日本人学校においても全国津々浦々一言一句変わらぬ形で習い学ぶということがくり返されてきたのである。国家的教育の怖さでもあるが、この浦島譚が一躍有名になったことの理由の一端は上述のような事情にあるのだが、この話が明治の末年になって突如として教科書上に登場したのでは勿論ない。それ以前の明治三〇年代にも既にこの浦島話は、舌切り雀、金太郎、花咲爺、瘤取り、猿蟹合戦など今日でもよく知られている昔話と

ともに小学生用の読本教材として採用されてもきていたわけだが、いささか教訓性や訓蒙性といった性格の強く込められたこれらの昔話が広く小学校教科書に採用されるようになったのは、明治国民国家の教育理念のもとにそれらを活用すべく企図されたものであることは当然として、にもかかわらずこれほど多くの昔話が採用されるように至った機縁は当時人気を得ていた児童文学者巖谷小波の存在が大きい。

さて、尾崎紅葉の『金色夜叉』のモデルともされる巖谷小波は硯友社系の小説家として出発するが、明治二四年博文館から創作童話『こがね丸』を刊行するや世評たかく、児童文学に新生面を開いたものとの評価をうけやがて小波はこの分野に専念するところとなり大いに名をなし斯界の第一人者としての地位を確立する。時あたかも明治近代国家の確立期にあたり、普通教育の制度も確立し知識の普及とも相まってやさしい言文一致体による児童むけの読み物も広く求められていたが、印刷技術の進歩、出版企業の成長といった社会的事情もあって、子供むけのとりわけ当初は少年むけの雑誌や読み物といった出版物もかなりの数流通するようになっていた。更にはこの頃極端な欧化主義への反動からあるいは、不平等条約に代表される欧米諸国への反発からわが国の伝

統的文化を見直そうという内むきの社会的氣運が醸成されつつあったこともあって、そうした社会風潮を見据えて小波は創作童話とはちがつて耳で聞く昔話を目で読む本の形で提供することを思いついた。この頃を機に、文明開化の名の下に波のかなたに押し流され忘れさられようとしていた古典的な昔話や伝説などをやさしい口語体で再話し子供むけに整理集大成することが小波のライフ・ワークの一つとなった。これがすなわち巖谷小波『日本昔噺』（明治二十九年＝一八九六年）であり、明治日本の国民童話としての国民的昔ばなしの定型化の一つの達成点でもあった。

ところで、「昔噺」「お伽噺」と称されるように、浦島太郎をはじめとするその他の多くの昔話ともどもとり小波のオリジナルでは勿論ない。明治期に入っても二〇年代までは江戸期の延長上にあり、草双紙の類の赤本や豆本といった子供むけの絵本がまだまだ多く刊行されていた。昔話や伝説に題材をとった洪川版『御伽草子』などの流れをくむ絵入り本の類も数多くあり、浦島伝説もそうしたものの一つであった。こうした昔話の多くが明治国民国家の理念のもとに結集され飾にかけられ、教育的見地の名の下に「健全さ」や「教訓性」、あるいは昔話の虚構性を無視した「全理性」が大人たちによって

過剰なまでに求められてゆく。子供は純粹無垢で善なものだとする大人の側からのリゴリスティックな先入観を押しつけ、荒唐無稽なものの極悪非道なものの性的なものと極端なものを排除しつつ、近代明治国家を担う子供たちに報恩孝行といった封建的な儒教精神を刷り込むべく仕掛けてゆく。小波の昔話の類も多くはこうした経緯の下に成立している。小波ははじめて浦島太郎の話がのる明治四三年第Ⅱ期国定教科書が作られるに先だって明治三九年二月、国文学者芳賀矢一の推薦で文部省図書課の嘱託となり、芳賀とともに国定教科書の国語読本の編集に参与しているから、『日本昔噺』の再話の大家として小学二年生用にリメイクしてこの浦島太郎の話为国語の読本に載せるべくリーダーシップをとったことは間違いないであろう。

こうした近代教育史の推移に位置づけられる浦島太郎の話は、国定教科書廃止後の昭和二五、六年頃まで教科書会社によつてはこの話を残したところもあったから、従つて少なくとも昭和二〇年代に小学校教育を受けたものの達、高度成長期の前に幼少年期を過ぎたものたちにとっては、何らかの形でこの浦島太郎の話には接しているはずで、恐らく現在でも四〇代以上の人でこの話を全く知らないという人はおそらく皆無に近いだろう。すり込

み教育の怖さでもあるが、さてこの浦島の話の内容をかいつまんで要約してみるにはこの話と同名の文部省唱歌がすこぶる便利である。この唱歌は上述の『尋常小学読本』の出された翌年明治四四年に『尋常小学唱歌』二年用としてこの音楽教科書中に採用され、物語と唱歌はあたかも列車の両輪のごとく機能すべく演出され、この歌も又全国津々浦々にオルガンやピアノの伴奏とともに広がったのである。

その歌詞にはこうある。

一、昔々浦島は 助けた亀に連れられて 竜宮城へ来て見れば 絵にもかけない美しさ

二、乙姫様の御馳走に 鯛や比目魚の舞踊 ただ珍しく面白く 月日のたつも夢の中

三、遊びにあきて気がついて お暇迄乞もそこそこに 帰る途中の楽は 土産に貰った玉手箱

四、帰ってみればこは如何に 元居た家も村も無く 路に行きあふ人々は 顔も知らない者ばかり

五、心細さに蓋とれば あけて悔しき玉手箱 中から ぱっと白煙 たちまち太郎はお爺さん

すでに上で述べたように、近代合理主義の立場にたち教育的見地からこの話を小学生相手に話し教えるとなると一番ネックとなるのはどの部分だろうか。この浦島太

郎譚のゆきつく『御伽草子』のそれを参照すると容易にみえてくるものがある。つまりこの小学校教科書中にとられた亀と乙姫は全くの別存在として切りはなされているが、実はこの浦島譚を中世に遡行する『御伽草子』世界へと遡行してゆくと、乙姫は亀自身であり亀が女性へと変身して男浦島を誘う典型的な異類婚に属する話であることがわかるのである。

御伽草子の浦島太郎譚

さて、この浦島太郎の話が文字どおり浦島太郎という若者を主人公として語られるようになるのは室町期末成立のこの『御伽草子』においてである。近代成立の昔噺としての童話と比較する上で、その前提ともなるので『御伽草子』の基本的性格と再確認しておきたい。この『御伽草子』は室町時代末から江戸時代初期にかけて作られた物語草子の総称で、約五百編ほどが知られているが、あわただしい世相を反映してか、短時間で楽しめる短編仕立てのものが主で、その制作年時および作者ともにほとんど不明である。前代の物語文学の作者が公家階級に属するものであったのに対し、この『御伽草子』の作者は公家のほか僧侶や隠遁者あるいは教養ある武家や市井人へと広がりを見せるらしいことを推測させる内容

をもつ。読者も物語文学の場合のように狭く少数の特権的な人々の専有物ではなく、広い階層の読者を対象としてつくられたものらしく、まさに江戸期の仮名草子や浮世草子へと橋わたしとする作品群だといえる。その内容も前代のさまざまな文学を題材として多種多様であるが、通常、公家物、宗教物、庶民物、外国物、異類物などに大別されることが多い。この浦島の話は異類物のうちに数えられるが、異類物とは人間と類を異にする物、動植物などの生物を人間同然に描き出したもので一種の擬人説話ともいえるものである。内容から見ても民間伝承が読み物化されたものも多くあつたらしく、この浦島太郎の話は人間と異類の恋愛結婚を扱った怪婚談の代表的なものの一つとされる。

『御伽草子』はお伽用の読物、自分で読んだり人に読ませ聞いたりして享受したもので、勢い美しい色どりの絵入り本で伝わるものが多く、見て楽しむ類の本なのである。従つて情趣を漂わせ心理を追求するという物語文学的手法はかげをひそめ、筋本位、興味本位でストーリーそのものに重きをおくといった点で説話的である。教養の低い広い読者層を相手に作者が伝え与えようとしたのは知識教養といったものの他に、教訓的で訓蒙性をあらわにした作品も数多い。又中世文学が仏教と深く切り

結ぶものをもつことは周知だが、この『御伽草子』でも神仏の示現・夢などが主要なテーマや役割を果しており、文章にも仏典から出た語も少なくない。この『御伽草子』は江戸期を通じて幼童むけのものではないが、江戸末期頃から幼童の慰みの書として赤本などと称して流布し一般化することとなり、今日の童話・絵本の世界へと道を開くこともなった。

さて、こうした基本的性格を押さえた上で、この浦島太郎譚の始源形ともいふべき『御伽草子』のそれを少し詳しく紹介してみよう。

昔、丹後の国の住人に浦島太郎という二四、五歳の男がいた。ある日海に出た折磯で一匹の亀を釣り上げ、彼はかわいそうに思い海へと放生する。翌朝、美女一人が乗った小舟が太郎のもとに漂い着き、彼女は彼に本国へと送り届けてくれるよう頼む。送り届けた先の海中の竜宮で女と夫婦となる。四方四季にかこまれた夢のような世界で二人して楽しい日々を過ごす。三年の月日を送るうち、太郎は望郷の念にかられ暇を乞う。女は嘆くが還ることになりその別れ際、女は太郎に自分は助けてもらった亀だと正体を明かし、美しい玉手箱を決して開けると言つて、形見に渡す。故郷に帰った太郎はすでに七百年の月日がたち、世間が

一変していることにおどろき、思わず女からもらった玉手箱を開けてしまう。紫の雲がたちのぼり、たちまち姿は変わり、太郎は鶴の姿となつて大空へと飛んでゆき、蓬萊で亀と再会する。後に夫婦は浦島明神として示現する。

先述のようにこの御伽草子版浦島太郎と、私たちが慣れ親しんでいる浦島の話との決定的な差異は、美女と化した亀と浦島太郎のいわゆる異類婚とそれにつづく別離の要素であろう。結婚をして彼の地に逗留するからこそ異郷逗留説話のそして本質的性格を強く開示するのであるうし、両話に共通する亀の報恩にしても仏教の善行の一つである「放生」をしてやることで亀自身が亀姫に変身して結婚するということに結びついてゆくのが説話の論理というものであろう。子供たちにいじめられていた亀をお金と引き替えに助けてやるという話とでは論話論的構造からいっても根本的な差異が生じてこよう。ただし、近松の『浦島年代記』に既に亀を買って助けてやるという筋立てが認められ、御伽草子の浦島譚にみえる異郷イメージが海中の竜宮と鶴亀の出会い蓬萊的性格を混在させているのに対して、海底の魚都化のみに限定されていて、近代の純動物報恩型の童話に近い性格を示している点にはなだ興味深い。

浦島伝説の古層

ところで、この室町期の御伽草子にあらわれる浦島太郎なる主人公の名称はこれに先だつ伝承中ではこの名前ではなく「浦島子」なる名称で出現する。現在のところこの「浦島子」を「浦の島子」と訓むのか、「浦島の子」と訓むのか単に音で「浦島子」と訓むのか定訓はない。後で紹介する『丹波国風土記』逸文中で「島子」と、上の「浦」とが切り離されて叙述されている箇所が散見するので一応ここでは「浦の島子」（＝浦の長者）と理解しておきたい。この「浦島子」を主人公とする話の最古のルーツは『日本書紀』の雄略二二年七月にあるものだが、そこには「丹波の国の余社郡管川の住人浦島子が舟に乗って釣をしていた折、一匹の大亀を釣り上げるが、亀はたちまち女に変身し、二人は結婚する。そして二人は蓬萊山へと出向き、仙衆をめぐり歩いた」とだけあって、つづいて「この話は別巻にある」と記すがこれは現存しない。従つて、これだけでは話の結構の細部まではうかがい知ることができない。しかし、この話と同根と思われる伝承が鎌倉時代中期成立の『釈日本紀』巻十二所引『丹後国風土記』逸文として載録されている。そこにはこうある。

丹後の国与謝郡日置里、筒川村の島子は実は「日下

部首等の先祖」である。雄略天皇の時代に（五世紀後半）

にこの島子は一人船に乗って釣をしていたところ、一魚もえず五色の亀を一匹釣り上げる。一夜あけるとその亀は、美女に変身していて、不思議に思った島子が女に素性を尋ねると、女は天上の仙人の家の者だといいい、島子はこの神女に誘われて仙都へと出向く。目をつむるとまたたく間に海中の広く大きな島に着いた。

神女は島子を門前にのこし家の中へと入ってゆく。中から昴星すばるや畢星あめりの精があらわれて、島子を見てこの人は亀比売の主人だと噂し合っているのを聞いて島子ほかの神女が亀比売であることを知る。島子は家の中へと招き入れられ、神女の両親や兄弟たちによって歓迎の宴が催されたりして、仙都での歡樂を極めるうちにたちまち三年間逗留する。そのうち島子は望郷の念にかられて暇乞いをするが、別れ際に亀比売は、もう一度還って来たいと思うのなら決してあけてはいけないといいつつ玉匣をくれた。島子は玉匣を手に船に乗り目をつむる。目をあけるとそこはすでに故郷の筒川であるが、故郷に帰ってみるとすでに三百余年が経過していることを知る。悲嘆にくれて島子は神女との約束を忘れて、玉匣を開けると、島子の体はたちまち若さを失い、風雲とともに飛び去ってしまい、神女との再

会の機会も失ってしまう。

この最古の神話的な浦島伝説に応接することによって、実は御伽草子の浦島太郎譚がきわめて中世小説的なあらたな展開の相を示すテキストであることを明瞭に見てとることができると思う。

即ち、古伝説にみられる水江の浦の島子なる貴公子然とした普通名詞的名称に対して、あたかも固有名的な浦島太郎なる名を冠し、中世的な強い一族、家意識と、それに伴う長子による「家」相承意識を反映させているらしいこと、太郎が訪れた異郷を海中の蓬莱山の仙境から海中の竜宮へと転じさせている点、助けた亀の報恩を、竜宮・異類婚姻の主たる動因としたこと、ことに動物報恩譚への変容は、妖亀との婚姻を主要モチーフとするより古層の浦島伝説が、放生とその報恩を語る仏教的教訓的な物語に変容するプロセスを如実に示すものであろう。更に結末で鶴亀のめでたき齡の添い遂げと、夫婦が明神に示現したことを記して物語を閉じる結構には御伽草子特有の祝言性や祝儀物、本地物としての縁起譚的側面が明確に示されてもいる。最後に浦島伝説の古層の結構、神話類型について一言して締めくくりとしたい。三浦佑之はこの浦島説話を馬養が机上で創作した神仙伝奇小説であると見做しているが、たしかに仙境淹留部分の肥大

化現象はそうした見解を許容するものを有している。しかし、画期としての雄略朝に日下部氏自身の始祖をかけ、そこに氏族の起源を求めようとする典型的な異類婚型の氏族始祖伝承が見るごとく中途半端なものに終わったのは、馬養が異郷を肥大化させ三年が三百年と隔絶したスケールをもちこんだことを継起として、異類婚、神聖王子の誕生といった現世的なものが相容れぬものとして、その場で霧消してしまう破目に陥ったことに起因するにちがいない。つまり、三年が三百年という神仙的尺度をもち込んだことによって、島子と亀姫の間の異世代の子息に始祖誕生を語る余地が失われたことにあると思えるのだが、なお後考を俟ちたい。

城 西 文 学 第25号

追悼 橋本博英先生……………青木 一男

＜エッセイ＞

継続する記憶……………上村 雅子

——七年ごとの映像記録^{ドキュメント}

＜論考＞

「雪の日」覚書……………青木 一男

説経「をぐり」訓釈（上）……………大内 建彦

——小栗・毒殺されるまで

ホールデン・コールフィールドとK……………中島 直樹

＜資料紹介＞

旅の記録・写真が語る戦地慰問……………長谷川 啓

——佐多稲子の未発表資料をめぐる

＜講演＞

語りかける記憶……………中川 成美

——文学とジェンダー・スタディーズ

漱石と文化記号……………石原 千秋